国語研究委員会

１研究テーマ

生徒が自分の願いを明確に持ち、適切に表現し、伝え合う力を高める国語学習はどうあったらよいか。

２研究課題

本年度の実践は、中心講師として筑波大学教授田中統治先生をお迎えして、５月２１日（土）に行われた教育会総会の御講演を受け、研究推進委員会で小中連携に向けての第一歩を踏み出そうとした試みである。

本研究委員会では、「生徒が自分の願いを明確に持ち、適切に表現し、伝え合う力を高める国語学習はどうあったらよいか。」というテーマの下、文科省指定の研究開発学校（品川区）の実践に着目し、「系の学習指導要領」を参考に、「小学校・中学校を見通したつけたい力」を「コミュニケーションをする力」とした。また、その実践力や具体的な力の窓から見た生徒の姿、願う姿を明確にしようと試みた。以下、その経緯を具体的に述べたい。

本年度、田中統治先生御講演「小中の連携を重視した教育へ」の中での「小・中のカリキュラム・アーティキュレーション」「品川区と京都市の成果に学ぶ」等の御教示に基づき、特に「小学校・中学校を見通したつけたい力」とは何か、という観点から、本委員会では次のような方法で研究を推進してきた。

「『伝え合う力』等テーマに関わった研究校の指導計画。小学校・中学校を見通したつけたい力、評価規準、単元展開。指導計画や全体的な見通しの中での研究授業の位置づけの明確化。研究授業（１時間）の展開等。」について後の二つの授業を通して検討を加えた。

〇事前研究授業「６月６日（月）常盤中学校３年１組　中国の中学校にビデオレターを送ろう」

〇公開研究授業「１０月１２日　（水）常盤中学校１年３組　小学校６年生に中学校を紹介するビデオレターを送ろう。」　　事前・公開授業者　小川洋史　教諭

本委員会では、この二つの授業を通して上記事項を検討し、よりよい実践のあり方について追究していきたいと考えた。

「小学校・中学校を見通したつけたい力」とは何かという課題に関しては、講演の中の御教示にもあった先行研究として、教育特区の事例であり、平成１３年度より３年間文部科学省より研究開発学校の指定を受けた品川区立伊藤小学校・上神明小学校・富士見台中学校の実践に着眼し、参考にさせていただくこととした。

上記先行研究では「小中学校　系の学習指導要領（試案）平成１６年２月」としてその成果をまとめている。

ここでは、子どもが基礎学習から課題選択による発展学習に進む過程で一つのテーマを深く追究するという主体的な学びを意図した総合学習としての「系の学習」に関する指導要領が示されている。「系の学習」は、「これまでの教科の枠を柔軟にして、実際の社会生活における一般的な領域（言語、自然、社会教養、健康、芸術）を設定して、子どもの発達にとって最も大切なもの（スキル等）を習得させる学習である。」とされている。さらに、言語系でめざす理論スキル・実践スキル・具体的なスキルが示され、小学校・中学校を通じて、小学校は二学年毎に、中学校は全体で具体的なスキルに当たる目標が示されている。端的に言えば、「系の学習」とは、小学校から中学校までの９年間で行い、「記憶偏重型の教科学習から脱却して、『一つのテーマを深く追究する』という主体的な学びを意図した総合学習である。」とのことであり、その力を「スキル」という用語で種々の技能としてとらえる立場をとっている。

つまり、この「系の学習」は、厳密に言えば、教科学習とは一線を画するものであるが、「教育課程での位置づけでは基礎的な教科の時間の中で行うことも考えられる。」ものでもある。教科の目標内容からの応用発展拡充として、重なるものもあると考えられ、また、「基礎基本の習得を目的にする教科の学習と総合的な学習をつなぐ内容も多い」とのことである。

そこで、今回は、この先行研究を参考とし、「小学校・中学校を見通したつけたい力」を「コミュニケーションをする力」とした。その実践力として「対話する力」、具体的な力として、「やりとり」「発表」「話し合い」「読み・読みとり・音読」を当てはめ、その窓から見た生徒の姿、願う姿を明確にしていくこととした。

３指導の実際

「系の学習指導要領（試案）」を参考にすると、中学校でめざす具体的な力としての「やりとり」「発表」「話し合い」「読み・読みとり・音読」の目標は次のようになる。

やりとり…相手を意図や表情を意識し合いながら、互いに尊重した受け答えができる。
発表…自分の考えや気持ちを理解してもらえるように工夫して発表することができる。
話し合い…話題を共有し、それぞれの発言を尊重しながら、自分の考えをまとめることができる。
読み・読みとり・音読（ここでは読み・読みとり）… 様々な種類の文章から必要な情報を集めるための読み方を身につける。

一方、常盤中学校においては、学校目標「たくましい人になる」から国語科の研究テーマ「たくましい表現力の育成」をめざして取り組んできた。この中では、話すことについて課題を持つ生徒の実態、委員会の研究として言い換えれば、主に「発表」する力に課題を持つ生徒の実態を踏まえて、「よりよく伝えたい」という生徒の願いを実現させる指導のあり方を追究していった。

その実践面での年間指導計画では、今回の本委員会の研究を受けて、どのような「コミュニケーションをする力」をつけてきたのかがその「具体的な力」として示されている。

６月の事前研究では、ビデオレターという題材が、生徒の意欲喚起に有効であること、客観的に自己を振り返りやすいこと等、魅力ある題材であることが確認できた。さらに、「相手意識を持つこと」「構想」の二点についてその大切さを確認することができた。

また公開授業 「小学校６年生に、中学校を紹介するビデオレターを送ろう」は、主として「発表」する力をつけることを中心とし、特に本時においてはビデオレターのスピーチ原稿を書く場面での工夫をめざしたものである。具体的には、学習カードを用いてスピーチ原稿のモデル文を提示し、そこで用いられている効果的な技法を知り、スピーチ原稿を修正していく学習活動が仕組まれた。

４事例から明らかになったこと（講師の御指導を中心に）

・工夫、スキルを教えることの大切さ
　発表のための工夫、スピーチ原稿を工夫するモデル文を提示し、形態模写をさせる等「こう書くんだ」を後押しすべきである。
・理論から実践へのせることの専門性
　（小中連携等）理論があればそれをどう実践に結びつけるか、実践にのせるかが、私たち教師の専門性である。
・小中９年間を見通した中での実践のあり方
　例えば「たくましい子ども」等の目標があれば、これを９年間で見通して、９年間の中でどう位置づけるかを考えなければならない。
　小中の柱をどう作るかが問題である。京都ではキャリア教育、品川ではスキルアップ（系の学習）等が行われているが、今回のようなコミュニケーションは柱として良い。
　小中連携は様々な応用性を持ち、教科を越え、教科をまたがった実践も期待される。

５今後の課題

・今回は小中連携に向けての第一歩ということであったが、より本格的に深めていくとなれば、なるべく早く取りかかり、理想的には何年かの期間を設けて、少なくとも来年度の研究に向けては本年度から研究がスタートしていく必要があるのではないか。
・小中連携のカリキュラムとその授業校独自の国語のカリキュラムや実践をどう結びつけていくか。これも、ある程度の期間を設け、時間に余裕があれば、より深まるのではないか。
・上記のようなことが可能ならば、郡研究日に小学校と中学校が共に授業者を立てながら（ＴＴ形式等)、一つの教室で授業をするような合同授業の形式も新しい形として試みてはどうか。